

(119 頁への追加資料) 命のパンについての説教 (ヨハネ 6:35-58)

パンを求める彼らの要求に応じて、イエスは、命のパンについての壮大な説教を始める。第一部 (35-50 節) では、人々を養う天からのパンは、イエスの啓示、あるいは彼の教えである (知恵のテーマ)。第二部 (51-58 節) では、天からのパンは、エウカリスチアである (秘跡のテーマ)。ここでの天からのパンと最後の晩餐に源泉をもつエウカリスチアの題材を組み合わせている。だから、ヨハネ福音書では、最後の晩餐でのエウカリスチアの制定を省いている。つまり、エウカリスチアの本質が、この箇所へと移され、知恵と秘跡の二つのテーマが、相互に補完し合っている。すなわち、これまで秘跡において公に唱えられる言葉をと神のみことばが、典礼の基礎的かつ本質的内容を構成して来たのである。

知恵のテーマ (同上 35-50 節)

旧約聖書の知恵とは異なり、イエスの教えは永遠に人々を養い続けるのである。また、パン屑が少しも無駄ならないようにと (12 節)、イエスが気遣っていたように、ここでもその教えによって養われた者が誰も失われないようにと、彼は気遣っている。とにかく、神の教えである天からのパンは、神の教えである生きてきた水と同じ結果をもたらす。すなわち、永遠の命である。

秘跡のテーマ (同上 51-58 節)

より踏み込んだ意味としては、命を与えること、そして事実、生きているパンとは、イエス自身の肉のことである。「わたしの与えるパンとは、世を生きるための私の肉のことである。」である。

ヨハネの強調点は、みことばが肉となり、その肉と血を命の食物として捧げたのである。それは、救いをもたらす受肉の宣言に他ならない。

つまり、洗礼が、御父が御子と共有するいのちを私たちに与えるのなら、エウカリスチアは、それをさらに養い育てる食物なのである。

イエスのみことばへの反発 (同上 59-71 節)

イエスのみことばは、不信仰をもって迎えられる。それに答えて彼は、教えの信用性を与えることになる出来事として、彼が栄光に上げられることを述べている。なぜなら、彼が栄光に上げられるとき、聖霊を与えるからである。そして、いのちを与えるのは、まさにこの聖霊なのである。